

「東京にこだわっていた理由ってなんだろう」。東京都内にある私立大4年の女子学生は昨春、都内のアパートを引き払い、故郷の宮城県に戻った。新型コロナウイルスの感染拡大を親が心配し、帰省を求められていた。授業がオンラインになったことも後押しとなった。

2年ぶりの地元で感じたのは、住み心地の良さや親しい人に囲まれた安心感。長年抱えてきた東京への憧れが薄れていくのを感じた。「住むことがステータスだと思ってたけど、東京はもういいかな」。就職先も県内のインフラ企業に決めた。

地元では対面授業を再開する大学が増えているものの、地方への関心は高まっている。若者の地方就職を促す厚生労働省のLO活（ローカツ）プロジェクトが、首都圏の約50の大学で実施する就活セミナーの4～9月の参加者は2963人と前年同期より約1000人増加。多くがUターンを検討している。私立大4年の男子学生もその



日南市での地域体験プログラムに参加する大学生たち「ヤッチャー」提供

一人だ。以前は都内での就職しか頭になかったが、親や友人とオンラインで連絡する機会が増え、「地元も結構、楽しそうだと気づいた」という。最終的にUターンを決断した。

同プロジェクトの8月の調査では「勤務地にこだわらない」と答えた学生が前年比2割増え、18%と過去最高となった。

LO活相談員のもとにはI・Jターン希望者を含め「東京以外に行きたい」との声が寄せられる。「地方で働く気つきを与えていきたい」。事業推進員の相沢眺は情勢の変化を感じ取る。

大都市以外で暮らし、その土地の文化を学ぶ地域留学も盛況だ。宮崎県日南市の地元メディア「ヤッチャー」が企画し、昨年9月に始まった地域体験プログラムはこれまで14人の大学生らが参加した。

東京都出身、東京大3年の木嶋祐太は今年8～9月のプログラムに臨み、今も同市で暮らす。オンライン授業の合間に地元企業でインターンに参加した。スーパーの店員とも仲良くなった。「人と関わる深さが東京とは全然違う。学ぶことだけ」と充実した日々を送る。就職活動も控えるが、木嶋はしばらくはこの地に残るつもりだ。

同メディア代表の杉本恭佑は「たくさん生き方に触れられるのも地域ならではの良さ。いつか日南市で活躍する人が現れてくれれば」と期待する。

コロナ禍は大学生の視線をも東京から地方へと移すきっかけとなっている。（敬称略）